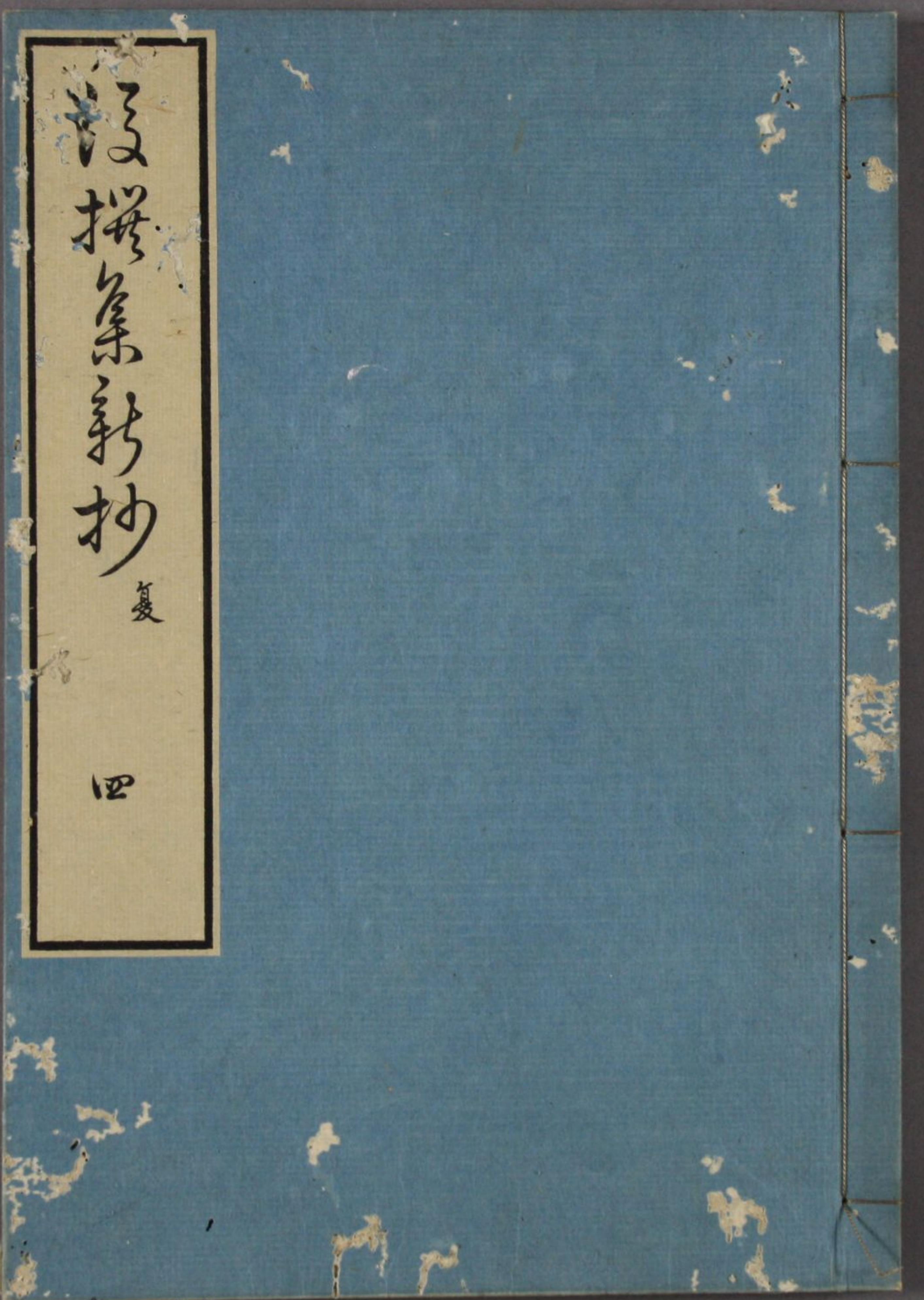


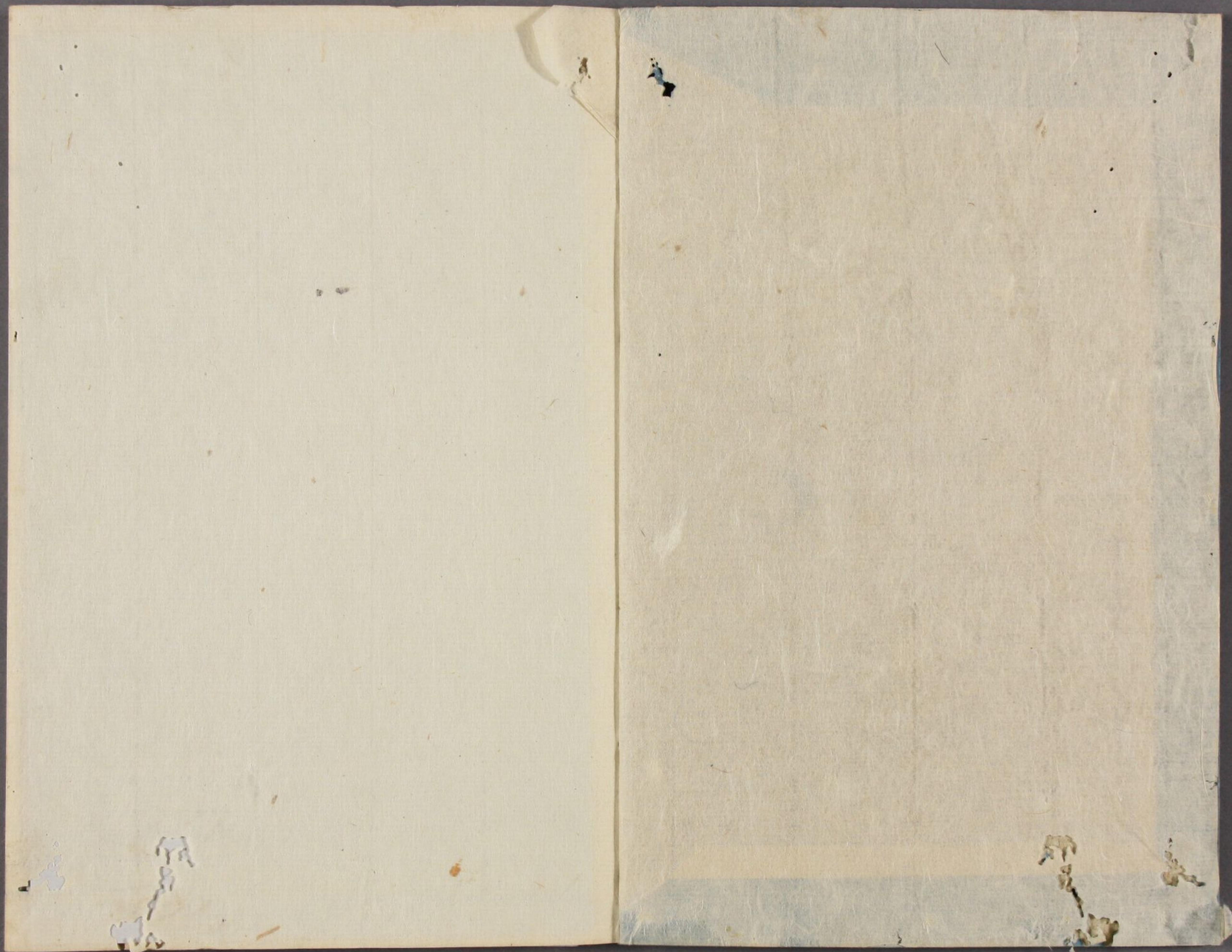
8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18

160

150

140





後撰和歌集卷第四新抄

夏旅

歌あくま

よみへづらば



文庫

かすりも夏の衣ふすりぬきせきる人まくちかくさすり  
○夏かすりて、妻の披を更へ改をつゝど。妻の夫まくちうざるよ  
となり。續古今雅上源見き巴の衣ふすりぬれどうきちかく  
らぬ身をいの小ぢんとあるあどをも。引合せてゐるべし。四句の  
三き。俗ち小さくとよにとし。拾遺雅あくまづき年にものきど  
も学のよきまくふをかくらざすり。などとの類なり。さて。更衣の  
日は。衣被のとすりだれ帳の帷かたあどまでちかすりすかて。葵光四十  
四年西の冠かわすり旅へて。衣うのほきうらひくまくなく。あざや

かくふくして。ち。但は葵光あるも。十月の更  
かどあるうめく。うつり  
うはうするさあ。まことかほくと同ふむのすなをば。翁了人  
風もういと。思ひよきくなく。けふをよくんして見るべき  
なり。今世の下ぎのまづ、ま万能どくらひくらまで見て。う  
なる源さんをくちらねずく。かくゆき。はあがみかよすも  
あきことのつとて。おおどろう。たくす。すべていきへの奇  
を見るに。も。そのものありまつをよくらひこして。んうべき  
なり。

和ふ乃みやみさうの伊勢集  
みやみさうのかきぬの身  
う月ばかり。おどらひまほる所をくはて。かきうべせうそま  
○六帖小用さうきのあお本  
うあるなどふりる趣をなす。

つうひつうひのまづ  
かりちざらの。  
をきくはせうそ  
うをくべせうそ

○吟詞書。いひざく。ぎくはくねば。上のめく改名てるるべ  
く。又。おとうめくぢうはくねばとゆ。やもとうきよ。つうひ  
びふるくう。

郊公えうこうかきゆかきゆきちかなづらまちどかにの。辨乃事べん事  
○友達を時乎かなづらへて。必消息さんといひよるが。もづきの無き  
を。徳をかういといへるなり。追あづると待遠とを射へて。ふーとせ  
るなり。 はあが三句。ちう。おぐらとある本を。いきど。そも銀なる事  
を。さうふりよまでも。うき。下。やふも。奥あゆる道とハナに。いき  
がく年ふさぱりて。事をまつうね。ともほ。

う／＼

杜鵑つじうゑまのやどはをうで。あふなく城きうぬをくしん

○ば方コナタふてきそなぐを立タケルて。ちくちのびるになくをぢ。ほど  
ときあら居アリあづ。まわらもぬなんアシんとあり。さて。おろち。もほアシ  
身フかうけアシ。あは四月のすアシれきば。まざアシーきひのきアシて。身フなく  
やいへるにをゆべし。

おりひうははる人のつれさくはくをバ。身フのかきぬのう  
乃花アシを立て。いひ入アシきてはる。

○は因アシ。一本小。ねいひつうはーとゆるち禪アシ。さて。せよミ  
人アシ。うめつまおき人のおのあをわるとて。身フの門アシのゆ  
まふ壁アシである御アシを折アシて。身フをほきといひ入アシくなり。  
あこくるすアシへ。因アシを小そざるやう。なれども。身フへの垣アシ  
のとくすアシりあふて。あうすやなり。

うたものとよひ。まめがうめのさけの垣アシもなづきアシ。身フ  
○つゝとくつも。もやうのむとくよふくして。ま實アシかうきねと思  
ひあり。おも。身フかうき。身フかうき。身フかうき。身フか  
えかうし。も。身フかうき。身フかうき。身フかうき。身フか  
いふなぐ。又。一軒に。身フかうき。身フかうき。身フか  
かうし。と。身フかうき。身フかうき。身フかうき。身フか

西一

うたものとよひ。まめがうめのさけの垣アシもなづきアシ。身フ  
○つゝとくつも。もやうのむとくよふくして。ま實アシかうきねと思  
ひあり。おも。身フかうき。身フかうき。身フかうき。身フか  
えかうし。も。身フかうき。身フかうき。身フかうき。身フか  
いふなぐ。又。一軒に。身フかうき。身フかうき。身フか  
かうし。と。身フかうき。身フかうき。身フかうき。身フか

うおゑのかきひあるかふて。

時立うべあれふそりやそるまでお姫ももたまにさけらう乃

○垣のもたまにち。垣のもたまむかどにとづきなり。古今上秋  
えぢあちぞ一ぬべき松林の枝もだよふたす色變。といへる。あ

そ小回ト。

あそちの。とくひすてこぬを。うみきもとそ。

今之か事あふ垣のうおゑ乃うとも来てとよ人のなき一の邸

○と向ハ。うそもといそん料の序なり。されどこの垣が壁もゆゑを  
見つむるまふ。いとどといそん人の頃か妻らりにふつきて  
ソひやまするあるべし。まろも。おゑの色おゑの多ふ仰るゆゑお  
まことにあむ訪とばういそだして。おむ訪と云ふわざ。ゆ

く絶足ふをあり。下句の妻妻お妻もといへる。妻の多力あるをあり  
也。妻麻呂きいへど。

景もすま

○一本ふ。うそりゆきよそろーき。

時立うべ身う雪うやるまでふうむのまきにまげふうのまき

○時立うべ身。四季をめうづけのきなり。ば何ハ。きうとうくといふ方

かううふなり。垣のけすにち。垣のけすかぎりほつけるま

ま。信ふかいも。垣根ドボ一面かとひそんぐめし。

かきわびぬそづらうゆかんほとくぎにむかひおゑのうげハちおゑ

○時立の屋敷ヤシキゆくゆくふ。家も泣クモリあづみうち。今ハ何處へうゆくべき。  
いやく。時立のゆくと紀もく。憂しとよあるのやゑのゆてあるめく

か我も何へりうとも。憂き世の中とばを離れてとす。古今夏  
五月あ小袖思ひをれば杜鵑想ふく夢をいづらじるん。前とぎ  
さうれどいかでか御みのうき世の中か時波うん。後拾遺<sup>夏</sup>我志  
乃娘のなまを時もいづきのそとも同じうがふ。あと引合せらるる  
事し。

御月をうち。月あゆううけのね。人ふき一々。

○一車に御月をうちのとゆき得あるべし。

あひ見てもまさ見えぬこのもかくぎて月にかくおぞよかゆざりける  
○抄云。子規の舟ふかく東も。例かゆき立まするとなり。古今夏<sup>又</sup>かと  
ぎにあく御きげばあらむかくぬ一室すぬ窓せんばは。ほん船  
あべしとひとよげふあらぐはとまわねど。船ひきうひぶ

ちきふもあれば。すく考ふべし。師翁云。ばすハモ。きふすだ  
みきうすの人ふきる後ふやうなるかて。もきるすと。細ふを  
あはげ。がくして。きひきもくるのあはばをりひて。すくは  
て。その時のあられ。男女互の情をかく見るかてもあらべしとい  
まれう。世ふかきと。なきくちうぬきなり。世ふきぬ。世ふ元  
氏お宿あどふ。きりく。新宿。拾遺。傷。傳。公のゆ方。かうすども  
つちまへど。いとときゆがり。拾遺。傷。傳。公のゆ方。かうすども  
なきあらて。後。二人子と。うき。差。人。改。左。近。少  
時。事。え。持。義。孝。ハ。サ。か。て。天。延。二。年。九。月。十六。日。か。因  
日。小。身。よう。う。終。よ。ア。ア。とい。へ。ど。い。う。あ。う。済。人の。身。な。れ。ぢ。う。世  
か。ぬ。か。を。か。れ。そ。く。ん。と。ゆ。な。ど。を。引。合。せ。ん。一。  
女のゆ。か。つ。う。ば。く。

あうよみ。あ羽乃山の郊。こまにすみて。りそばもある。う邪

○あうとのみちをすとほくをみて時もの聲ひすゑをぐる。形  
の見ゆるふたとくたり。初二句のてきも古今夏月の物  
とぞお山の時もちとある聲なり。さておとはすゑとくよ  
を。絶この声ハとちをかきさせらるなり。鳥獸などの声を。都といへ  
月ふむうひて霞公をなく登るけし里遠みうちも。四五里乃たと  
きくかへか橋是我がのそめかさきてちるみ。又康ふもいへふも。  
古今れ上秋夜をあづらふせてなく康の日。御まどもその聲とい  
ふを。女の聲ふりけるにもあらぎ。の方ひとりても。所を也  
のみすゑとくよきのみなり。はことはよくぞばせおざいぬべし。  
女の河とすゆといへ。存立とすゆる事にて。古今旅又伴局か一お  
はでいざことへん故を我只一人をありやなしやと。又下雜氣を  
至ていけるのひなれ我身をば何うち人ふ所とらむ。又あり

トモふまくきものをお坂の室の所すとほくけうりす。かど  
か回ド。れ下にま  
リベし。きにすゑとすみていへるを。そりをつよく  
いへるふて。ふるにす。下龍二川づきを。あともよん山風ちと  
か。下龍三。かざれとも立ちと立ちかき  
おふきことか一草もうひやめうん。あどりふ洞の聲なり。

歌一  
らべ

いせ

これがそれであきすりとも杜宇もひぢはく。お枝うつも勢よ  
○み舟を船てせんとて。本源て居るとも。相あはげ令習。おも枝うつも  
て。ああかなくふうつて。我舟の梢ふも東西けとなり。新公ハ。若  
き橋あどりて。ちく。音をほそる。船ふよるも多かれば。そき  
本源てとひ。舟あはげ。おとひうち。枝うつせよとせいへる  
な。きく枝うつせよとせに。おのづく。我舟ふも東西けと云

きハふとみてすゆなり。五月給といへるも。ばちハ。月を思ふ。  
五月をかのう時となく候どもひて。あはくハ五月ふなげばあり。  
古今夏まづきまう山みちうらはほき今もなうせんまきのふる聲。  
伊勢山に付。本うれでさりき約万のやう。ぎくすゞむかど  
の聲をきくはや。あともゆ。

つうの法云。若原か  
ほどの余歸ふす。候多の男。人のよふうつゝ候多の又  
はくふ人の手に  
うつゆく。又

つうの余歸ふす。候多の男。人のよふうつゝ候多の又  
のと。かきつゞく。かつけてかつてかつてかつて

○此詞書。いと古語。もとてよきよへば。男とあるハ。奇

ふする。化者の多くうのめくすゆれば。のぞきて。右記タ  
ルヲ。のぬく改てえべし。ゆくハ。男ハ他のもとある。そ  
ナリ。男の代の女也。よかうつまることをよがひやまうとも

旦人ど。さてちあふあちば。人のよふうつゝ。かつて化の  
男かうつまることと。つうの強ふる。

良峯義方朝臣

いひうえー。若の若のかきつゞく。をばかりうかくみなりけま  
○け社若のところ。首我が毛ひすたる時の。かくみふて。ゆううとも  
りふべき色なれ。古代のよりへきべて首ふもひだりぬるすよとい  
ふをかて。社若の色をかりことと。と下は句の言ふ。加久等を入きて  
まくとなくべく。ハ思ひられど。わいさくらぬずれど。もある。  
そも。領書と合ひそる。二句。若の若と。へる。即うつとの余歸  
の家のよにて。そも。かは。ある。社若を折て。今うつむけ居る。禁中局  
あどふやりたるあらん。さうでハ。二句の若と。いさりんぬる。

六帖カタふち。首の人のとあれども。さてまいふくうちかわべくも思

まれえ。又初句。りひそぞりとひ詞也。ソモトうたううちぬこそ

ちく。詞ちことくぬかやあん。あやまく考ふべきなり。

葵<sup>アゲハ</sup>花<sup>ハナ</sup>の。お見はゆる女の車ふりひへて候る。

○葵<sup>アゲハ</sup>花<sup>ハナ</sup>。四月の中<sup>ハ</sup>十四日<sup>ナウ</sup>。公事根源云。若<sup>アサシ</sup>の告<sup>アガフ</sup>けよ

モ。今日人<sup>アヒヒカツラ</sup>。葵<sup>アゲハ</sup>植<sup>ハシツ</sup>のかづらをかうるなり。

### 人不<sup>アヒヒ</sup>知<sup>スル</sup>

りうふやううち人のむうづかけをしたのむあひてふゑ城

○三句まで。ひうけてといちん料<sup>リヤウ</sup>の序<sup>ハシ</sup>。四月の相<sup>ハシ</sup>をみていへるなり。

越<sup>アフヒ</sup>を<sup>アフヒ</sup>蓬<sup>アヒヒ</sup>を<sup>アヒヒ</sup>逢<sup>アヒヒ</sup>ふとひうきて。きとひうをひにうけたのむと

なり。やそ氏人<sup>アヒヒカツラ</sup>。天皇<sup>アヒヒカツラ</sup>へ見る。氏<sup>アヒヒカツラ</sup>多くの人を<sup>アヒヒ</sup>詔<sup>アヒヒ</sup>詞<sup>アヒヒ</sup>な

る。社<sup>アヒヒ</sup>小<sup>アヒヒ</sup>宿<sup>アヒヒ</sup>とて。りうふ多くの人とひうきなり。玉かづら<sup>アヒヒ</sup>。今日人

人のひ小魚<sup>アヒヒ</sup>。葵<sup>アゲハ</sup>桂<sup>カツラ</sup>の鬱<sup>カツラ</sup>をひうなり。玉うづ<sup>アヒヒ</sup>。あうづ<sup>アヒヒ</sup>。など<sup>アヒヒ</sup>。妻<sup>アヒヒ</sup>

し。四句のうけて。とひう詞<sup>アヒヒ</sup>。祭<sup>アヒヒ</sup>かうるにも。にのちふううに

も。絶<sup>アヒヒ</sup>をば輕<sup>アヒヒ</sup>くも重<sup>アヒヒ</sup>くも。よと廣<sup>アヒヒ</sup>く幸<sup>アヒヒ</sup>く詞<sup>アヒヒ</sup>小<sup>アヒヒ</sup>て。集中にもいと多く

君<sup>アヒヒ</sup>。それば。あふあふ例<sup>アヒヒ</sup>をどきりとば。

### 五

ゆびすたうけてもひひひあざ人のゆひひふあきみをだかせ

○初句。本綿<sup>ユフダスキ</sup>譯<sup>ハ</sup>。松<sup>アヒヒ</sup>詞<sup>アヒヒ</sup>。をうにすまねを以て冠<sup>アヒヒ</sup>せむる所

モ。我<sup>アヒヒ</sup>かくしき人<sup>アヒヒ</sup>ふまひとひすすハ。清祓<sup>アヒヒ</sup>ふまひすすつま

を。今ハあひかどつてはのはかうけてもひびきあひなう。  
ま句れち古今一意<sup>意</sup>とすし川ふきみをだ神ハうけを  
ぞなうにゆくもとゆるすがまあるべーと。わが友古道いへて。

歌<sup>うた</sup>文

おのひゆちふりあとミ杜絶<sup>絶</sup>ひみづれてなうぬ日<sup>日</sup>を那<sup>那</sup>  
○ふ序<sup>序</sup>あきゆれれてといちん料<sup>料</sup>かを時のねを以てひ。新云ハ。なう  
といちん料<sup>料</sup>の序<sup>序</sup>なり。ばあ。貫<sup>貫</sup>之集の意<sup>意</sup>が入る奇<sup>奇</sup>て。げふ意<sup>意</sup>  
意<sup>意</sup>にて。と帖<sup>帖</sup>ホ<sup>ホ</sup>ふりあ小札<sup>札</sup>をみ。残あれざんをあひぢかめれぬ  
日<sup>日</sup>ぞなき。とあるなど<sup>の</sup>類<sup>類</sup>とあほ。。おうふ。初二句<sup>句</sup>はさぬハ。五  
手<sup>手</sup>あが中<sup>中</sup>にち。男女の多<sup>多</sup>すを忌<sup>忌</sup>むと。候<sup>候</sup>ふすうていへるにも  
あんう。身<sup>身</sup>一粒<sup>粒</sup>きバ。二句ハ。ゆれれてといちん料<sup>料</sup>の<sup>の</sup>にちあひ<sup>ひ</sup>。

用<sup>う</sup>ある詞<sup>こと</sup>を。

まゝ人を詫<sup>詫</sup>あひなくにてかとまじひ<sup>まじひ</sup>の御<sup>お</sup>不<sup>ふ</sup>あうばうかん  
○抄<sup>抄</sup>ふ。我<sup>我</sup>こそあひ。我<sup>我</sup>方<sup>方</sup>あひで。只<sup>只</sup>ひの御<sup>お</sup>の不<sup>ふ</sup>小字<sup>字</sup>うどう。うんと  
まうとゆう。げふじをな<sup>な</sup>ぐし。はあきど<sup>の</sup>て小をは。玉<sup>玉</sup>枝<sup>枝</sup>の毫<sup>毫</sup>  
猪<sup>猪</sup>小<sup>小</sup>か<sup>か</sup>も<sup>も</sup>びと。古今十<sup>十</sup>に引<sup>引</sup>らのくのあふめりすり。傳<sup>傳</sup>ゆ名<sup>名</sup>了<sup>了</sup>  
れんと只<sup>只</sup>よ我<sup>我</sup>あひなくふ。因<sup>因</sup>のふのあゆ<sup>ゆ</sup>を思<sup>思</sup>ひ山<sup>山</sup>のとちふ  
きえん<sup>えん</sup>りをの<sup>の</sup>そ。万<sup>万</sup>葉<sup>葉</sup>ハ<sup>ハ</sup>引<sup>引</sup>く小<sup>小</sup>時<sup>時</sup>事<sup>事</sup>。ゆく<sup>く</sup>時<sup>時</sup>も<sup>も</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>  
の里<sup>里</sup>小<sup>小</sup>ふのう<sup>う</sup>な<sup>な</sup>く。古今十二引<sup>引</sup>くを<sup>を</sup>ぎた<sup>た</sup>れ。あらち<sup>ち</sup>く<sup>く</sup>ト<sup>ト</sup>世<sup>世</sup>  
おきあきぬといひちあすと。又古の<sup>古</sup>の<sup>の</sup>引<sup>引</sup>り人<sup>人</sup>を<sup>を</sup>れ。あ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>か<sup>か</sup>く<sup>く</sup>ふ<sup>う</sup>ね<sup>ね</sup>小<sup>小</sup>對<sup>對</sup>へ<sup>へ</sup>。うそ<sup>そ</sup>  
うのあ<sup>あ</sup>と<sup>と</sup>をぬ<sup>ぬ</sup>れ<sup>れ</sup>て<sup>て</sup>。は枝<sup>枝</sup>。その<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>て<sup>て</sup>り<sup>り</sup>よ<sup>よ</sup>ね<sup>ね</sup>小<sup>小</sup>對<sup>對</sup>へ<sup>へ</sup>。うそ<sup>そ</sup>  
うのぬ<sup>ぬ</sup>化<sup>化</sup>の物<sup>物</sup>を例<sup>例</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>。古今十<sup>十</sup>にのあ<sup>あ</sup>ハ。只<sup>只</sup>ふ人<sup>人</sup>小<sup>小</sup>對<sup>對</sup>へ<sup>へ</sup>。うそ<sup>そ</sup>  
うのあ<sup>あ</sup>く<sup>く</sup>か<sup>か</sup>く<sup>く</sup>。ゆく<sup>く</sup>小<sup>小</sup>字<sup>字</sup>。か<sup>か</sup>く<sup>く</sup>。代<sup>代</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ハ。只<sup>只</sup>ふ<sup>う</sup>人<sup>人</sup>小<sup>小</sup>對<sup>對</sup>へ<sup>へ</sup>。うそ<sup>そ</sup>  
小<sup>小</sup>人<sup>人</sup>。万<sup>万</sup>葉<sup>葉</sup>小<sup>小</sup>字<sup>字</sup>。一<sup>一</sup>と。委<sup>委</sup>く<sup>く</sup>い<sup>い</sup>れ<sup>れ</sup>。か<sup>か</sup>く<sup>く</sup>き<sup>き</sup>は<sup>は</sup>う<sup>う</sup>お<sup>お</sup>  
細<sup>細</sup>を<sup>を</sup>他<sup>他</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ふ<sup>う</sup>ば<sup>ば</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>う<sup>う</sup>な<sup>な</sup>う<sup>う</sup>。

身<sup>身</sup>ひつち<sup>ち</sup>に<sup>一</sup>花<sup>花</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>や<sup>や</sup>る夏<sup>夏</sup>を<sup>を</sup>緑<sup>緑</sup>の<sup>の</sup>一<sup>一</sup>け<sup>け</sup>を<sup>を</sup>

○おふらちゆうなう。まよひつけて。おもをちよきなりとゆる  
めくちくべし。まう。仍とかやゆあうげふもすゆをば。玉葉新か。  
後朱雀院の侍ことをおがえしなげきて。右川殿かわどり一<sup>アシテ</sup>  
るころ。日本かりか。まよひきちぬき。青葉ある梢を拂候して  
上東門院じょうとうもんいん一<sup>アシテ</sup>梢のまちぢくまくいと。緑の葉乃とあき  
る。とほるなどの葉小やとも四へど。あれ。菅原万葉集すゑ也。毫小も。反歎  
ふ載せぬひて。は下毛の侍を。漫人のござ。べき。うち。人の候  
とく用之。きふし。朱明稍來。春花傳。青陽暮行。公鳥忽始。波姫声露。馥  
あまふくとあくま。雨輕風不起。塵と云。を濡らさざれど。おの候のめく。夏ふたりて。  
花をちよふをあくべし。

朱雀院のまよひおもくましゆる時。まちはまく。五月むづく。書

おふらちゆうて。まけあどくべて。おきかれあくべに。

大春日師範

○は朱雀院も承平の帝をやまむなり。上皇じょうこうもどか。院の侍し。  
されど。こハ朱雀院のみのぞあどやかなべき事歟。此  
帝のいまと。喜々かて大やくゆく。時。喜あち。美おほ美夜みよと  
おちよ。トウグウと。字もゆそむべし。は帝のころへ。あら  
ゆすらし。アキレガなり。さて。喜々とも。皇太子こうだいをやまること  
もまく。喜々の帶刀たわぎ。御書ごしょ而アリ本てなり。帶刀たわぎ。  
春宮の侍のまなり。禁中にち溝くぼとひ。喜々とも帶刀と  
ひ。院いん北面きたとひ。皆同そ。武士士なりと。縣長大人けんじょうだんじんいを  
き。職原抄。春宮坊條下云。又帶刀者。撰そ重代侍補じゆ。自じ公家  
被補せふ也。昔者源平重代武士多補そ。などとく。御書ごしょ

多秘書を差むる所なり。それを預る司河。和名抄小蘭林坊。  
在式乾門内東。今拾芥抄在侍従所南。有公卿別當預。云こと  
を為御書所是也。拾芥抄在侍従所南。有公卿別當預。云こと  
尼大春日師範ハ隼人佐御書所預。と作者部類ふるべ  
ア。

ふ身あすま乃ま人うの時を御云をやうぶむすせざん  
○身のまへまのまの身方の人とひそりゆ。品帶刀をひなう。身と  
ソリ相ふそりて。おこを名ふてやまんとあり。賴基集よ。松の根め  
しまで。身まにまわうて。雁の鳴を。かくかくへあるうゆ。うおがつ  
うめ身のまき松の根あれば。とゆるあども似ましむか。ア。  
夏せ秋ふうやぶげことひとくをばて。

友原義輔胡良

みづう松の下けゆくすにまか乃筆の松ふくこのとひそりく  
○抄云。松風入夜琴のんあう。松の更るすに。ももすもあされぢ。た  
松風とすゆるとあり。師翁云。筆の松風と何ハ。朗詠小索。索  
秋風拂松テかどものき。又外にも。琴の音にす一何の故事を文多う。べ  
し。さるを。下テの音少しき。伯牙の故事のきふくらうて。よすれても。的  
ゑし。まくいへり。といふれうち。絶きば。はあゆき。た。筆の松  
風とまくとまきのくにまくまきなり。拾遺上琴下がまき筆の松風  
かづくづく。いづれのきまくまく。まき。かどもの數甚多く。  
かくまく。

かくまく。

豊之

あもきの山下松もゆきうよひ琴の絶ふき。あづる筆もまく  
○師云。上碧輔の奇ふる砂のまきの松風と何るを。ほちゆえ。伯牙絶

経の故事の志在高山<sup>アシカ</sup>のすにとうなまわるあべー。多砂の  
峯乃ちともほきバ。もとよにす一あるなり。すうて志在<sup>アシカ</sup>流水  
ちのをひてあ。もまの山下かとよまれるをべー二三句  
を。山下水<sup>アシカ</sup>行<sup>アシカ</sup>ふとすれば水の音が行<sup>アシカ</sup>す琴<sup>アシカ</sup>音とよすにて  
なるあり。山下水<sup>アシカ</sup>音<sup>アシカ</sup>琴<sup>アシカ</sup>の音をきけば感ぜら<sup>アシカ</sup>も。音<sup>アシカ</sup>流<sup>アシカ</sup>と  
するなり。琴<sup>アシカ</sup>の音<sup>アシカ</sup>とよき。琴<sup>アシカ</sup>をきけば琴<sup>アシカ</sup>の音<sup>アシカ</sup>音<sup>アシカ</sup>流<sup>アシカ</sup>  
ふとえり。流<sup>アシカ</sup>と流<sup>アシカ</sup>とを云のゆやよひなせるなりとい  
むれう。す。龍麻呂<sup>ルミロ</sup>ハ主の君の彈<sup>アシカ</sup>の琴<sup>アシカ</sup>音<sup>アシカ</sup>をきけ<sup>アシカ</sup>。因く  
すくのめく。うれし流<sup>アシカ</sup>水の音<sup>アシカ</sup>ふゑひてす。仰<sup>アシカ</sup>とよの<sup>アシカ</sup>。  
上の通輔<sup>アシカ</sup>の手<sup>アシカ</sup>ね風<sup>アシカ</sup>の手<sup>アシカ</sup>ふすあね<sup>アシカ</sup>とべ。あとも波<sup>アシカ</sup>水の音<sup>アシカ</sup>ふ  
すふせんなり。またかくね風<sup>アシカ</sup>流<sup>アシカ</sup>水<sup>アシカ</sup>はすあせん<sup>アシカ</sup>さかをよめるち。琴<sup>アシカ</sup>を

奏する絶<sup>アシカ</sup>のど。もうまあいせ。おのびうほむき<sup>アシカ</sup>がある  
なり。かくて下句。音<sup>アシカ</sup>水<sup>アシカ</sup>流<sup>アシカ</sup>と。感<sup>アシカ</sup>流<sup>アシカ</sup>を傳<sup>アシカ</sup>き<sup>アシカ</sup>をふるなり。絶<sup>アシカ</sup>  
ども。そも重<sup>アシカ</sup>のとみて。表<sup>アシカ</sup>音<sup>アシカ</sup>を流<sup>アシカ</sup>す。あつといへり。 美石  
云。琴<sup>アシカ</sup>音<sup>アシカ</sup>小感<sup>アシカ</sup>じて流<sup>アシカ</sup>を流<sup>アシカ</sup>す。ちめぐ<sup>アシカ</sup>しきるにてもある  
ど。万葉集七琴<sup>アシカ</sup>トれぢあげき<sup>アシカ</sup>紀<sup>アシカ</sup>づ<sup>アシカ</sup>ば<sup>アシカ</sup>とも琴<sup>アシカ</sup>の下極<sup>アシカ</sup>不<sup>アシカ</sup>  
やこまれ。同十八<sup>アシカ</sup>絶<sup>アシカ</sup>せと<sup>アシカ</sup>琴<sup>アシカ</sup>ともなべつて人の<sup>アシカ</sup>お<sup>アシカ</sup>だ<sup>アシカ</sup>  
をいや<sup>アシカ</sup>き<sup>アシカ</sup>ても。うつが物語<sup>アシカ</sup>上琴<sup>アシカ</sup>の音<sup>アシカ</sup>も希<sup>アシカ</sup>少<sup>アシカ</sup>す。曉<sup>アシカ</sup>ハ<sup>アシカ</sup>もあ  
ざれて<sup>アシカ</sup>與<sup>アシカ</sup>うり。あとおまく。 又古道<sup>アシカ</sup>。ほ<sup>アシカ</sup>ハ。山下  
水<sup>アシカ</sup>。琴<sup>アシカ</sup>音<sup>アシカ</sup>を流<sup>アシカ</sup>す。とる。さす<sup>アシカ</sup>ふすゆ。今<sup>アシカ</sup>音<sup>アシカ</sup>の水<sup>アシカ</sup>細<sup>アシカ</sup>  
あくべら<sup>アシカ</sup>。水<sup>アシカ</sup>をきけば。泉<sup>アシカ</sup>の流<sup>アシカ</sup>す。もつともすあきて。さて  
さていそぞよき涼<sup>アシカ</sup>きすにてゆうとよの<sup>アシカ</sup>て流<sup>アシカ</sup>す。とうづ

ふにちゆうびとつへ。

歌

名取子経朝臣

夏の秋ちあふねむしてあまくらひはく方ふみを一ふけふ  
○きゑのあなり。おき短歌あきばきといふおがかりにて。床の塵を拂  
ふる小歌もよとなり。おとこも床枕かどめ扇拂なるを。やう  
て床の下にひかるなく。捨遺まつりそと起きてくちをく人のふとばや  
すぬぎ。ぬくしき。とあるなどの歌あり。されど。かくさぬふ。枕詞  
をやうもまわのゆに用ひたる事。万葉集に。卷三小足日本能研根許  
其思美ミミ。之。是。十一小足檜乃下風吹夜者公守之其念。とほる。あとの  
事にち。をきく。そき。古今集などより後小ち。きりくそく。う。おけ  
うハ海のべきもあきだも。うもけせぢ事よりべし。

みのたま

暑うもあひみだるのき夏乃春の曉づけもれなうけ。里  
○此う忠岑タチイシ。是。女。の件。小まうけしよ。いくぞくもあくとあけ  
作。うを。女。と。詞。あり。それまでことふよくす。  
あひしを。仔。のち。かきも。これも。かき。ハ。あひめぐつ  
むことありて。え。あひめぐれ。れ。れ。

よみ人ちゆうべ

よみ人ちゆうべ。うも夏の秋乃君もてぬ。暑ぞもかあううう  
○よみ人ちゆうと。おも。方。と。あく。ま。む。と。底。の。秋。の。秋。ち。短。く。は。く。か。く  
と。あ。て。よ。ひ。ー。う。も。又。一。き。は。ち。か。か。き。す。ふ。と。な。く。し。 よ。き。の  
か。く。と。ハ。我。身。の。上。か。と。く。で。た。お。か。よ。く。か。り。の。す。せ。り。ふ。な。ふ

卷一。えまくぬ着とひ。只一人ふきよとるつる方をなく見えま  
をりへととすや。古今の氣にもすきりてきくあるもの見えま  
ぬ着のさむかうけ。あとの類なり。ほうあてちたびアレ  
もすきば。もすきアレども。うつ、あてもぬきもぐして。ちく  
ちくちくみる着ふ。そのうふきうつとるも。夏の頃き熱の  
よみれが。いともうおうしゆがとよかて。ちくち方をあく只  
あるのを。女の体よしめやりとるが話をするべし。師云。はあ。何  
事の一軒にあひててはする。うれもあきもういと云を用ひる  
時も。夏のあど小一度まで。その度ち互小障をかうて。やまくる時の  
あともうべきあ。までも。氣をあざうとよすハ。いまゞ、不<sup>アザ</sup>き一己  
前をひよなう。いまと不きうちにもうかとうを無て見て居る。

甚ちかあきぬなり。あうる小夏の取一度見えられども。寒ふ着のぬ  
くかてあうしうば。それをえ果ぬ着もはうあきゆなくしよとひ  
かう。ふきかよひくとよすづれが。たゞく友取えも。一とび  
きくもハ。甚かあきぬと云ふちあるまじれども。我中の夏取の着  
のめくふきゆは。すきかよひくとよももかなくとハよき。なる  
程。シ一此後のみなくば。古今の氣の引立のやうせく。きさ  
きうなる着ふいとくをアモスガモナリ。などと之と同ド。うご  
されど。すきく試よりのこなうといもれども。  
ちうの秋。あうりあうりしてえアホの人のもと。又の所  
あはうげー。

○又の所アホ。聖朝あり。

伊勢

うめとまくとはす／お時を起ようく日をもさゆ／つう難  
○おえお終へてあうでぬ／おとを。二声ともきうぬ新公ふくへてよ  
きるありとけり。今思ふ。詞中のさすは。無事もゆ。能くも。  
教ふうく用をさすんとハ。起て列つる身をひあべし。又家集  
小ち。秋よりて新公の一あまき行ふ。と詞中あり。かくてちた夏  
東のきなう。

人の辞小つがそーけふ。

石原安國

あよとえ／音ふきみて夜が日乃暮が紀をとあげたつ。うれ  
○うれすてきよことハキとすりかあもざれぢ。せきてちきよみどりに

と思ひし。やまふきふとアツミバシわふあひて。又再度多ふとえ  
ふまもづれと思ふ。立の日がモケレぢ。まうれび紀をあげまつ  
る身かみとぞう。されば此をもとあるハ。まじ難きをあげくぞ  
うふ。又日の言難きをあげくをあれどなう。

よみ人あく

うめとまく／あくち部／あくのぬとかきうけきち歌くや  
○疎す／身も。おきも。そ／と通る。時を小比してよあう。歌の  
あてあぐれをきハ。今朝ぞなくいあう。ほま／とうとすとすとめねぢ  
伊お。とおふちゆ。師云。一首のきハ。今宵ぜふまくとすとすとすとめねぢ  
も。我を歌じてうそくもなくて。ふもとけむ。寧ふきゆハあうし  
を。よ／うめとまく／おく。むつよ／くうちとく／とくとくかく。曉す

らば。あうぬあきへてなまくべきふ。あうぬがあくす。うとくす。別ふ  
あくとよふやうなり。されど此説はもとひがい。うとくす。  
ふくの。いとよすがやうなくぬ詞のきひがす。よくさん  
ねざへといれど。龜麻呂云。今朝の別よ。かごうをしげもえ  
名詔をぬき。通て庵あすのほ身にて。うけはうとくす。うい庵は  
あうば。必済ふむせびて。我と同ドさすにあきゆふて。あくじきね  
を。と云ふて。古今・夏・時・ながおく里のゆゑ。あれがなむうとくす  
きぬとよのうをかみふとくすにちあうじうとくす。  
只すりけのうる。杜経をすて。

あうじて書をのうせ。ほくぎはしげまあぐれの枝枝は伊勢集でとふ店て

○河の郎はおのちげ。小店て。まきをがなくめく。我もあげきの  
あげき中なかれ。時もくすもなく店てのを店するよとくす。  
とふき。なげきのしげむすを強くいへるあくべ。大和わ語か。な  
げきのもあげきのやとくぎに。おううれあても書をのうせ  
く。とゆるもたゆる。いひぢりなり。

四五月をかり。書きふへまくすりとするうる。あくぎは  
をすて。

時々おとちよきげが旅とや。ゆきれられわうきのをしきみや。こ強  
○郎は。坐すわか。坐すわか。旅ふて。住すわたと。あのゆくゆく。あとく。おや  
我を經訓するを。あれが。おげき。旅あるのを。とく。杜経ち。  
ゆすり出で。呼波る方を。かきが旅政とひあすす。万葉集十小稿よ

あて事のひさし御と神あび山ふさづけてあく。かどるの説あり。

ミヤコモ。宮所モ。天皇の大宮の所モ。かぎりて。ソアリナリ。

都字小あづむべきにあらば。いもゆ。都會のまこと。此を。こちのついで

より。

陀伊もく文

もとより居て物を。我をほとぎん。と。をなく。もく

○は。奇を。万葉集ハ。小き。歌。と。う。あ。お。よ。ひ。よ。歌。云。こ。ゆ。鳴。と。ふ  
ら。一。あ。し。よ。か。り。かく。さ。方。小。裁。せ。き。ゆ。か。今。あ。万。葉。と  
小。召。そ。と。お。引。き。され。る。な。り。と。よ。べ。き。み。も。あ。だ。そ。ち  
い。う。か。と。歌。や。集。を。持。わ。れ。る。ち。即。万。葉。集。を。よ。そ。と。う。を。持  
ふ。つ。い。で。な。る。す。ハ。和。平。紀。と。る。が。め。く。れ。ち。万。葉。の。訓。点。と。よ。ふ  
ま。の。ち。け。時。代。よ。海。い。空。き。く。き。る。す。と。す。や。さ。そ。後。せ。く。を。持。て。保  
ま。る。ふ。と。く。ま。る。す。い。と。ま。く。な。り。に。た。を。又。を。き。世。み。か。り。て。や  
古。ヨ。手。の。道。ま。う。す。な。り。て。人。し。経。て。お。考。へ。き。と。見。お。よ。て。や

よろしくなれる。さ。り。み。ち。あ。ね。ど。も。お。い。づ。き。り。ふ。く。の。訓。小  
かなへ。ふ。そ。き。そ。う。ざ。た。す。な。り。お。き。ば。く。せ。ふ。あ。万。葉。の。訓。点。引  
合。せ。て。以。集。あ。ど。小。裁。せ。き。ゆ。か。方。を。引。き。され。る。な。り。と。さ。く。そ  
い。ち。ん。ち。い。う。な。る。す。り。か。き。ば。な。り。こ。ハ。例。の。つ。い。で。よ。り。ふ。な。り。  
か。く。て。一。首。歌。を。お。と。ひ。を。な。ぐ。さ。そ。び。や。に。な。く。ち。ん。あ。る。す。い  
き。う。と。う。あ。り。と。万。葉。の。伝。説。ふ。を。署。解。小。も。あ。ね。ど。も。今。足。よ。な  
ぐ。ま。そ。び。や。に。とい。へ。る。ち。き。る。や。う。な。り。た。我。一。人。か。げ。き。び。る  
や。う。に。事。を。な。く。ち。ゆ。も。お。と。ひ。の。あ。ね。ぎ。か。く。わ。び。一。き。歌。を。ふ  
を。あ。る。に。う。い。う。そ。あ。ふ。も。ん。あ。り。て。な。く。歌。り。べ。ー。と。う。を。よ。て。  
古。今。夏。あ。む。き。の。山。岡。を。き。り。そ。く。て。お。れ。う。や。う。と。鳥。を。の。う。ぞ  
な。く。捨。遺。三。五。の。く。免。ふ。呼。く。う。わ。く。き。か。と。ぎ。れ。お。も。ふ。や。だ。ハ  
ち。よ。く。や。か。く。ん。な。ど。の。た。ど。ひ。あ。と。く。忍。ち。る。

五。か。か。  
う。一。げ。歌。つ。わ。ど。の。杜。鶯。ま。二。春。を。な。む。く。あ。ー。う。歌

○玉桜首き。阿ケといちん枕詞也。二声の下へも抜きり。東の方の  
部公が。多くい鳴うべふた。ニ声をあくる事か。アカス  
ソナシ。又とよふ。意のきみて。極めてほどの所も。し  
さ小列をくしみて二声と泣てもおまふ。急ぎてゆる事。云々  
みて。あ向一軒にならざとある方を用ひんも。難くべくんうとも  
思も。

五月ばかり。おりよ女よつうそりける。

○おりよ女よ。おうそりひ居る女とよきなう。

數をうぬ。山のほとく。ぎく本の葉。うれのこゑ。ちゆゆや  
○數をうぬ。身とひうけ。なう。かく数をうぬ。身をねぎ。歌の  
本音。かて。ゆくがめく。思ひくふくをす。うおんのかどをばか。

かとうかり。新勅撰。才。墨ハ。あゆの杜乃。かく。ぎく。本の下。こゑ  
ぞちよべ。なうりける。

歌へふえ

やまやう。歌とも。あふん時。き。うげき。み。山。小。な。よ。か。角。く。草  
○と。あ。つ。み。ち。と。こ。し。か。へ。よ。い。つ。ま。で。も。と。り。ふ。き。な。り。は。の。の。り。本  
を。見。合。長。す。べ。し。あ。げ。き。み。山。や。ま。だ。る。山。小。と。り。ふ。き。み。と。り。ふ  
ふ。ま。ま。る。き。き。あ。く。ざ。く。し。歌。き。ハ。古。今。夏。か。今。さ。う。に。山。へ。ゆ。る。な  
時。も。こ。心。の。か。ぎ。う。き。我。あ。ふ。な。け。と。仰。ふ。や。仰。う。か。く。て。み  
山。と。い。へ。ぎ。源。き。山。の。り。と。ん。ゆ。る。ち。地。な。り。山。の。下。で。も。重  
あ。なる。山。の。は。方。な。る。を。ぞ。外。山。と。り。ひ。奥。彼。なる。を。ば。み。山。と。り。す  
な。う。古。今。集。神。社。の。あ。ふ。み。山。ま。ま。河。き。う。く。し。と。山。な。る。す。ま。れ

のかづく色づきてたう。と仰るすゞふてもんゆべ。み山のみち。ゆ  
ちくハ假字。み山時。三吉野。万葉ニ。真熊野。真吉野。あどちも。み高。之  
も高の除き。などのみと同じく。當て流すんぢへなり。  
きよハ姓也。などのみと同じく。當て流すんぢへなり。

ふすく小ちい  
を伝うる詠さば。  
寐ルヤイナヤ。テ  
ヅサ。難美ニ思ハ  
レル。と云ふとし。

○ふすくにき。附ともまくにとひすりみて。一首のきハ。高麗の短き  
あらかじめ。かう夏。風の歌のきうとすれぢ時をなく一こあふ  
ト。さすがに。附ともまくにとひすりみて。首のきハ。高麗の短き  
ても。ほ古今。おもを引合さしふねべきなり。

つうけ経云。二条古大  
臣。がゆはるる時。西  
から。下はるるをう  
へのをのこども六

三條古大臣。がゆはるる時。一のびよかうふぬはる。越。うへ乃  
をのこども五人をかり。五身のなづあすこへやうて。月あがろ

人をかり。五身の身あ  
えすこへきえ。外お  
ぎうあうけ。お。酒と  
うへんとぞ。うれ女の  
まふおへてつけ  
るを。がねばうねぐ  
ゆで。ゆうけに。  
立やうへて。すじ  
むせかど。城内れバ  
あうトの女。

なうけるふそげたうへんとぞ。おへてゆる城。がねをかき方  
をゆく。ぎりくねぞ。たちやすくひて。ゆうど。ゆくをなぞたまふ  
を。ゆうれぞ。

### ゆうど。の女。

○三條古大臣の。いま。がねをかく。くる。ききくろ。恐て通  
ひゆ。女のおのゆる。を。知る。處。上人。と。い。に  
ゆる。やね。くる。人を。よ。なり。委  
く。難。一。ひり。よ。を。よ。へ。五。六。人。を。かり。五。身。あ。す。こ  
や。ま。月。の。就。た。る。お。は。女。の。裏。か。て。酒。飲。ん。と。え。縁。よ。お  
入。る。か。そ。こ。ろ。ち。が。ね。ハ。き。は。や。は。女。を。お。離。方。か。う。し。ゆ。を  
か。そ。れ。も。五。身。の。件。よ。ハ。石。か。ば。だ。う。一。の。ば。殿。よ。人。を。立。休。り  
ひ。て。が。ね。を。は。女。の。隠。へ。う。と。呑。よ。ま。ア。か。て。が。ね。あ。る。を。出

せなど成るやうへかとあら。まことれがく

てはうざりやれど立やまひて。と何の事のまゝと見え  
だ。今宵必入ガねハ便のめもあらべし。至而へかへて。グね  
をヨビシガツセ。さて酒を飲んといふい合せふて。ふい  
ふかへ入る小。グねのあくびれが。まおぬきかち  
るゆゑふわろく立やまひて。あくび出せなどいぢれくる  
事とまゆなり。此詞あんど。まのまおてへりまうぬ  
きれある。ま。いとよくすゆる。あきど。全神のまぎり。いとくおとけ  
さうかうする事。あくびをまく。あくをまく時の事とあ。  
人のふぞなど。見るがめくふちとくれまるハ。まくとふこ  
さかうある世のとづいて。後妻の人など。うけても及ば

ざるなり。まうハ。まう記  
ス内あつたながそくせる。内なれど。まうふ尼。まう雲隠つ  
○づねを月小あざへて。象がそみがそくせども。まう尼をかむ方  
をまゆゑふ。まうにもまうがやあ。ふ者ふもぬをまゆゑ  
徳を。ま向を限つとくとも。何方へまきれあくきひに  
とくよきをあくもきんう。

まく人ちくじ

まばうる家をあゆひ。までしこが花のさかわを人ふきうす姫  
○いとけふきをどまう。秋おとくふき領どまう女のすなれば。代の  
人の物とハするがとまう。万葉三小印結而我定。位古の演の小

松ち後もわざね。と何るに因ドんぢへなり。

志をゆすりよ云々。

万葉ニヨ。おとをあて立つてあゞぎバ追及武道の多カミ小標結者エシカムが勢セ。とありて縣居大人云。山後あどふき先ゆく人の多べの物を絞ツラフをあくにちいへり。け因云多て縄引ヨリて道のあづへとし。本ふヒトどなづく標とするかあり。すにすうそくらべーといひぞれ。又巻一ふ。あうのさん紫附ゆき標野行シノヨキ。と何るハ志をあうきて。は捕志珍シテシキふ情神をひ。毛二ふ。又みお大山守ハ誰あう山シマ標結君シマユラもまさしくふ。と何るも。人を入志をぬシマフ。とひ。毛モかくらんとかかカカてあうせぢた情神シマとひり小標結シマフを。とあるち。この汀シマ小情神のつき一時。志を縄ゆひもて。承く宿をまくんものをといふアア。天皇アマテハ。布刀王命ブドウノミコト。以尾久米縄擅度ヒツクミヨリタツタシ其御後方白言シリベニラサク。從コ

此以ス内不得還入。とある款なるすもいもれ。こうじくを合せて  
スル。おれど。よくんぬらう。をり。か。せば。け。の。糸。すう。我。あめゆ。い。  
ミ。印。結。て。わ。が。ほ。き。そ。ー。う。ふ。ど。ハ。標。立。縄。引。そ。ー。キ。ど。して。  
我。お。と。化。の。人。か。お。れ。さ。せ。ぬ。や。う。に。ー。お。き。た。る。牛。麦。小。ね。か。ど  
か。な。ざ。く。へ。て。い。へ。る。な。り。

歌あくまえ

あ。むき。お。山。附。を。うち。は。て。き。ね。う。ま。う。れ。や。ま。を。の。み。ぐ。な。く  
○古今。夏。よ。入。る。す。な。り。我。お。只。ひ。あ。り。て。あ。き。て。の。み。あ。る。時。一。も。彼  
毛。附。長。く。房。も。な。り。に。家。お。き。そ。ひ。部。ま。なく。よ。と。な。り。うち。は。へ。を  
そ。ほ。へ。の。ほ。へ。ち。延。の。き。あ。て。ち。く。つ。く。き。を。る。す。終。底。大。人。い。も  
き。こ。う。うち。く。と。き。う。ち。と。い。そ。う。お。ん。だ。ハ。ま。へ。ど。も。う。け  
き。こ。う。ち。う。き。な。り。古。今。敵。上。か。國。を。そ。ー。時。う。後。ち。う。ま。へ。て。世

つうき疏云。五月もあ  
のうち。えーく絶好か  
ける男の。また。まう  
ねば。きん。

き事なれやむのをある。とある。あども。おひ合ますべし。まく延々と云  
は。今。の。係。おも。女の。機。の。経。を。の。づ。か。下。まへ。う。延。と。ゆ。縄。の  
綱。の。横。ふ。長。き。を。引。ゆ。き。を。も。綱。を。ハ。ヘル  
といひ。を。綱。を。も。や。う。て。ち。人。あ。ミ。と。り。く。り。

五月も。が。あ。の。うち。む。さ。ー。く。た。そ。を。べ。と。お。ける。きんな。の。よ。と。に  
お。う。う。う。う。う。う。れ。ぎ。

まう

女

つ。ま。く。と。あ。づ。む。を。せ。か。と。く。ぎ。に。と。ふ。つけ。を。休。き。な。く。き。け。ふ  
○え。い。く。終。ゆ。す。よ。る。若。き。て。あ。る。こ。ろ。を。れ。が。か。く。お。と。づ。き。絶。ふ。う  
う。れ。き。ふ。は。き。を。も。日。ご。ろ。の。と。づ。き。の。う。き。を。お。ひ。出。ゆ。き。そ。く。休。よ  
な。く。の。き。絶。よ。や。り。よ。な。う。

歌

○

○お。み。人。不。知。と。つ。よ。す。か。ま。う。と。整。冲。法。師。い。ち。れ。う。

色。う。ぬ。る。橋。ア。ホ。ト。ギ。ヒ。ホ。代。を。あ。づ。セ。ル。三。ち。ま。ゆ。な。う。  
カ。ツ。ム。キ。ギ。ア。マ。ス。ル。中。勢。集。

○ホ。代。を。あ。づ。セ。ル。ハ。ク。ー。か。ん。手。を。う。ひ。て。別。を。も。る。な。う。橋。ハ。万。葉  
六。よ。た。ち。を。あ。き。立。ま。く。あ。さ。く。を。參。ま。枝。よ。事。す。れ。ど。い。や。と。こ。そ  
の。本。な。ど。も。い。ひ。て。と。た。ハ。本。な。れ。ぎ。ま。く。ぬ。と。ひ。ま。で。教。え。お。子  
代。を。本。別。ん。ら。あ。る。さ。方。よ。い。重。る。な。う。は。あ。中。勢。集。に。ち。屏。風。の。繪  
か。め。手。な。く。と。絵。ち。あ。り。か。ま。ぎ。望。の。時。の。屏。風。か。ど。な。く。び。け。き。が  
絵。の。き。も。あ。ん。年。こ。と。ふ。つ。き。く。ー。思。む。

旅。の。ー。て。ほ。ま。ざ。ひ。ま。ー。時。を。神。あ。び。山。ふ。ま。す。ア。ケ。く。あ。く  
○万。葉。十。の。あ。ま。え。初。向。橋。よ。じ。て。と。か。り。裏。屏。風。え。旅。人の。故。つ。を。立。む。小  
よ。ち。へ。と。よ。め。か。神。奈。備。山。ハ。大。和。云。市。殿。主。神。あ。び。の。杜。も。因  
お。な。る。す。整。冲。法。師。い。ち。れ。う。

夏の朝アリ申タシ人の音をとぞ見舞花橋をもと金なりけふ

○おえ、ゑーき人の音ハ、橋ホ美ナシねば、エーき人の音をとぞてゆく  
ホ、花橋をもとべとめ。首の人の袖乃音をす残、をうふてなりと  
いへり。呑すよ、轟きをげふおの後のめくをもべし。我もども首の  
人の音をあそびうとひき。いふあん。サキよみ人もくばま  
きバ。古今のあそび先なんや後あんや、さうがけきばなり。六  
帖ホ、時を花きをうがおの音をとぞてなくま音の人やエーき。と何ふ  
なども。太うき同ドころの音なり。

女のあえふさうりゆうりけるに、あと車かくはふきうりゆう  
ふよのなごりひうりて、後よつづけうり。

○初の、女のとつす降くべく。又おかり出の出の字あきかち

コロキナ・つるひ候ふそくう。

伊勢

郊云うあら音残ますとてゆくぬもそれとおがえうれう  
○えぐうなう一音をすくう後ちされなぬ人の音も、もんうとお  
がめきたとくとくすくとくとく。おほくとも、いふあんとた  
どくとくきの宿をう。おがつうか。おがく。おがくおあひて、いさ  
さうばく、美をう。おがくおがくとくとくの活用たるあがく。  
五音をうはゆるに、とくとく候。

おも人不知

さみれのほ々年年のなづきをうち物をひあんふせをわがく一音  
まじめぬくとくき伊勢集  
まじめぬくとくき伊勢集  
○おふち、室のちあひおどひをさへ合さうがわがくとくとくと

あう。今あゆよ。いあへるきと云ふ何ハ。ぬるぐ。お足りあへ  
ぬ。お足りあへを。あど立ち。皆あひせんのとなり。裾どうあへぬ。意も  
す。小。万。そらあへぬまで。あどらうす。人。筆本など。皆然為不遂の  
きなり。又。悉。模。あへも。ぬく。ざ。十八。あども。令。谷。の。を。か。す。ド。へ  
合。ハ。ま。ま。き。な。り。然。ま。ど。も。お足りあへふ。と。ゆ。す。ハ。古。件。の。あ。へ。  
ち。別。き。な。べ。く。只。ち。れ。が。亦。よ。例。章。ど。毛。足。ひ。出。ぎ。ん。ぬ。う。も。う。  
師。立。脚。立。脚。立。脚。立。脚。立。脚。立。脚。立。脚。立。脚。立。脚。立。脚。立。脚。立。脚。立。脚。立。  
て。折。し。も。み。自。あ。の。時。よ。さ。一。会。せ。く。お。足。よ。と。云。き。ま。も。行。く。ん。う。  
折。す。考。べ。き。る。あ。う。太平。ハ。伊。勢。集。朝。見。ひ。た。ぬ。き。の。方。を。是。  
と。と。へ。そ。と。い。ち。れ。う。

女。よ。い。と。身。を。お。り。ひ。て。う。こ。そ。

杜。経。む。と。身。よ。あ。う。れ。夏。乃。秋。の。曉。ぐ。や。あ。ひ。ぞ。な。る。ん  
○。古。奇。古今。よ。夏。の。秋。ハ。と。す。う。し。と。ば。か。と。と。さ。く。あ。く。一。春。よ。ゆ。ゆ  
あ。の。先。と。も。あ。る。ゆ。と。經。き。秋。あ。る。ふ。又。身。を。か。く。と。身。を。巴。  
と。や。か。く。や。と。人。目。を。つ。み。か。ど。と。代。の。人。を。き。は。や。あ。る。と。此。の  
曉。方。が。や。う。く。と。我。が。中。の。身。を。身。や。あ。ん。と。あ。り。身。を。經。も。な。く  
別。き。る。の。の。う。身。を。い。へ。る。か。う。  
古今。宿。入。立。ること。を。主。病。と。み。あ。ひ。そ。と。身。で。あ。き。こ。そ。わ。び。ー。う  
そ。け。を。と。所。も。お。高。ア。ラ。小。う。け。て。主。二。立。い。へ。る。よ。ち。あ。れ。ど。主。を。因。ト。行。け。集。立。ニ。立。六。か。ど。中。も。身。  
経。と。り。身。を。そ。く。う。又。捨。遺。立。ハ。主。を。そ。く。立。よ。な。う。あ。ん。時。よ  
う。そ。人。を。思。ひ。の。や。ま。ん。ざ。ふ。せ。そ。と。あ。る。も。止。ん。時。ふ。と。い。ち。ん。ざ。ご  
と。と。

歌ノ文

うちもて身をすうじう様のむなき身も我さするの  
○おもへ上ふも時延と因ト人との詞みてはもくつくをりよ  
す。まうせのとよちどきむなきとほん序あらう。上  
句も我身の上ふたとへまるかて。りづよいへるにちあらば。  
むなきとハ身をのまきうし。もうひもなむ身をす我を  
すうかふとよなり。意のああるすい傷ふし。う様のむなし  
きといへふも古今<sup>古事記</sup>引<sup>傷</sup>のうをえつ。あぐさをつまこと  
ゆるなどぬく。蟬脱<sup>セミモヌキ</sup>のきをいへるなり。かくて様をうけせ  
とりよき古今以後のすだう。古事紀。日本紀。万葉。古は詞いと多  
く見られども。皆怪のす小顯<sup>コトヒ</sup>き身。歌の世。すゞりすり小て。今  
の

歌歌、小ある外。今は歌の身の余。歌の身の余ある。世。歌の身の人をえきのまなく。縣君大人も空蟬かどむ一ハ  
備字たるを。後人を空蟬の字よして。蟬脱<sup>セミモヌキ</sup>のすとよも思へまち。さてうつて。うつともよみて。うせとよもいぢ。そ  
うつて。歌一きタてよきをうつまうせなど  
いふも。身の物ろひ一ねざりまし。左うか奇集のひふ下までハ。即<sup>即</sup>蟬  
のぬけ小壁て。とかなれまふもひひか。又蟬をやがて。あハう  
せみゆうとよもよみて。かぬけまふものなれど。いまてある  
を。もううせとよもよみて。古語を忘れるなまなり。是ハたゞかの空蟬  
の字をもさざで。古語を忘れるなまなり。古今集のひハ。中世  
以下がれば。やよりれつとまへるのがあるぬぞか一あと。委  
く<sup>冠</sup>解<sup>解</sup>考小いもれど。

つもなす夏乃葉落よかく病を命とくのむ様のもか那さ  
○お小炎天の葉落ハうはまやまくちかあけとバ。ちとふきとなり。と  
あるひとく。二句の夏のと云詞は深く深むべきよもゆくば。きと  
多葉よおく病のちやもあくぬおを。命とたのむよせそりふさよと  
りなり。つるふきとハ。お住かもなむとソラキみて。うつせみ  
の世もあそびとま。世の中つむにもづをあらくなど。つるふ  
回ド。命とてのむハ。様を飲て食ふべふどもひて。病のをみて  
命を保つものなれどある。

や重むぐわげき若小ち夏むーのこゑすうわうにとく人をも  
○けあるひ落葉ハ。様をぞしていへども。吹下小づえどもかうれ  
ぬとのきなつてのけすうほすく思ひなうけとほる。葉をも

てりへると回ド。物となく夏生といへど。おげき焼塗とあぶ出のう  
のうとも。葉のうと  
一筋のきハ。古今秋小回ぐーのなく山里の  
夕ふきち風すうかよと人ちや。とく小やけく。  
○様乃こゑきくかく小物ぞ見ふ承をむなきよすすへど  
○お云むだきせとハ。ちかふき養あらう。様のまきをきけば。承も  
ちかふくをかきせふ往て石きば。うれぎ病を命とくのむよもよ  
かく思ひとくべられて。うちつけ小物ぞ見すすめ。當承万葉  
かく思ひとくべられて。うちつけ小物ぞ見すすめ。當承万葉  
けきとくをもじ合せてるべー。  
人の作よきへ。

巻原師尹胡居忠美

いのせんをぐの山乃時もおぼつうだーとをのとせ

○小倉を晴きよりひなして。拾遺夏。夙夕やまくは山の杜宇あ  
まく山の新るの。そことなくたゞくへき。音をかきあくよと  
ひて。さて。我も若達方のおぼつかぬきを。音小泣てのこすすよ  
とす。おぼつかぬと云詞ハ。秋の裏立のきの方ふで。罕く是  
名アホーたすよいへふたり。約遠なるき残いへると同ト。

さひもくべ

のみ人不知

かよくさへあうけが。乃へうゑきう紀世の才をひきうちけり  
○曉方ハ叔の竟なれど。叔をひそめとひべき財利あり。またねどりあ  
ふ人を。こと小叔をひそめ。泣ひきものふて。叔も叔あくね  
ぐれど。叔を夏まくはあつまのとて。曉方お嘆する一節ハ。正夏ま  
くは。叔の中浅もあく。難際なまよとがくべ。叔中と世中と。

詞曰。掛けバ。世間のをとをとて。夏世を夏叔より合せむなり。  
六帖より。引よとまゆあく。スの戸のひよちつきあふを  
けるとほのなども。夏世を夏叔をかひるなり。  
人一れぞわがあそび。あひで。こそ花喰ぬべき聲を東小計ふ  
○抄小。立あ小や。床立ハ女の子に用ひ本も。あり。時ハ。あふ様をそ  
ゆひーと。圓らなべーとひる。めく。初向のまよ。改て底のまよと  
せゆきバ。人の娘の。いま。幼稚をじと。もの内よハ。我ぬと頷あき  
きる。今ハ。まよ。をそめかく。もんも。娘べき。やく。成  
長。せぞろほきたる。さすが。よといへる。なべー。三向も。いま  
ど幼稚ころも。のす。ア。ふうけて。いへりと。又。ゆきバ。まよーと  
ある方。ことふつき。くくす。也。

我やどめ垣まほたき小桔こじなでなでこち花はなみかんよおへおへほほ名<sup>ま</sup>万葉  
○浮奇ハ万葉毫まほハ出でて春相聞まほふ相聞まほとあるふて御處ごしよす  
あふででこりしかもうことあり暑辭おひせよあででこのあさかが妹めい  
小女こめいへそんそんをとねうとほりほり毛けよとくとく毛けやうよほ出  
るをよなぐべべ.

とくのなぐの花はなをと見えばとみ一ひと月つき日ひもみドドうかりかし  
○二句ハ化かよハ見及みだらる絶ぜつぐれども無事むじのまゆく萬ま事じかく閑  
晴はるなる霞かすりとす也ゆ河海抄かわみえ第本卷だいほんまい小こ又また首萬事まほにあ思おもをとくとくみを  
みもつけ窮きふもととけむなり是これハ萬事まほの一名いちごとなむとくとく  
よつまくとく無事むじすなうととあるハ善よしなうらむりあきよよにと  
アシテあとおとおとととハうば毛けども無事むじとと字字おきき

思おもひよよも回まわドるかくて一首しゆおととハ萬事まほつてよし外ほか日ひも長ながく竟  
ゆくを早く體たい妻めの喰くけううおきよよてよよだせせを長ながくとも思  
くくをととよよりて貫ぬき之の集しゆととあふふの花はなをを見えばうちももへて  
ととれ自じの數すうをああきよよすすある數すうよよべべ.

思おもひよよも回まわドるかかねぬのわどももに乃な那なむ  
○思おもひ初はじえてようよううおなかくくづづふふてああバばんの字じども毛けよ出でて  
ああくくえそくそくんんととよよをを時ときの系いの名なふふくく。ああががああややととせせふ  
かかももああんん。ととおおううとと云いををおおししかかへへのままよよりりててきき万葉  
丁ぢ七しち奇きふふもも曾そ能タガ多タカ知タチ夜ナイト麻マ尔ル越エク中チ國コトの立リ特コナツ許ケイ奈ナ都ド爾ル由ユ伎ギ布ブ理リ之シ伎  
底タメええとと何などどか同なまドドととここちちの剣ケンののどどももひひててええーーきき  
どどうう小こ久く立たののららりり。ああーーここももののどどうう。思おもひひ初はじえててききをを潔きよ

てへもかせ。色に見えなんといふまたかをせよ。まじめ。  
されどこハ。畢竟小うはる事にあれば。一首以上もあげう  
だ。る詞のあやのこなう。かくふことも只ひ涙ふべうべ  
え。二句思ひうきてぞ。只ひ初る事にあれば。涙てのまみて。  
深くちむをうえて。とがあつよ常住不絶。人の肉より涙く只ひ入り。  
只ひあゆ一々うきうき涙くば。涙の深きの量を。色よがきをんとうき  
のぬくも思られ。又より右等の説をす。畢竟のあおきの涙き  
みゆくか。とこなう<sup>レ</sup>と。の言ふ。只ひ初てあらがいあ  
と小などいふのぬく。ほほの涙の深きがめくに。只ひ初てあくび  
ふきぢ。かくのぬく。ほほの涙の深きがめくに。只ひ初てあくび  
をくば。と曰トく。あくびのきふたるなり。人<sup>レ</sup>きぬが胸の中乃  
んのむ。深き志の量も。今日ふるの志の色がめく。人<sup>レ</sup>きぬが胸  
令添

をんといふのぬくにも只ひうれど。打<sup>レ</sup>かよきうろにかづ  
きうちうといむれう。あやうく考へべきなり。只ひ初のもの  
みあくで。只ひ涙のきふりへる例も。古今十九ふ。あくことのすれあ  
ふ色ふ只ひうれど。とゆるなどあり。

うへ

いろどりへぢうだもうすむもきのすれぞやすや極みちよ。やま  
○やに見てあんといふをとが見て。毛とくへぢ。泣き落きの傷み。す  
べて頗難い。接子もある時落きうき。必スる時の傷みがとがり。末  
句あるよのよき時とりふすをし。まるハ。ふとくもふと。時とくふと  
回りを。又あくよなくあどりふよを。世の字あてまあきども。まハ  
時とりふよ回りをれど。かくさかよきひとも。よの詞を。いづれも時

とりのふをきをうと。師翁いそねう。

師尹朝臣のまゝわらもみてはゆる時。ととなりめまをくまくお  
てぬれを。せ毫ふつけて。あいのかみの方小あくうはる。

ち政大臣

すゞこちいづれともおもせんへどもおうむてまくちゆゑなりきも  
○犯者を政大臣。小一衆・貞信公まで。師尹朝臣ハ・貞信公の末の子。内  
侍イシタケ・かくち・まことひて。同様くも女なり。伏見守。尚侍マサシタケ子も師尹も。共  
小継子をも。いづれともまことにあくうおき中にをまかき方アキタケ。わ  
きてほまれよ見ゆるよとあく。あまねき。信よ。カアイキ。ムゴラシ  
伊などりよと。六帖。高ゆカツシタケ。おへぎつれもかき。朝勅チヨク。なで  
てあく。うあみこぢばく。

きいづき。

まみんきよ

あでこのあたり方ふなりはうり御行枝アシタケちくくな

○一首のきかうれど。万葉十。時ヒメべとばたて。このちか  
まかくち我すれきをづくら。もと何ハくもばく。回カク。何ハくとハ  
ちくきがれど。秋を従シテきゆゑをさけうけめ。又足アシタケふ。秋  
の召アシタケあくとをほ人のきよもあくん。

○かくきかくふもゆだなんをあれぢはうきをばかうとおうふ筋アシタケ  
し。うるそとくの難ハシタケ。奥義抄アオイシタケ。想も因も皆あくうむゆをあきか  
く。あくんとあくふ。日の暮ハシタケがたあげきもゆアシタケとまむよ。とみ

きども。かくても結句にもうなまぬ事す。初句のながとい  
ふ頃のまもをがへふやうなり。ながくとひを。信よハ。なまど  
もとひやうのとガリガリ。もしかり。アホ世人とも。雅ちなるも御  
ぎ。すべて。某などアモハ。某のまもといそんがめし。古今ミタマ夏の趣  
をまよひかづく明めをうちハ。宵禁ヨシキアテて明めをなり。又。  
詔詞カヒかづく。天皇のおもかへえすりを。神あづれまへせまくお  
ど云。数多くありて。皆天皇ハ昂顯アキラカニ神カミて大タカシアレ。宇都神ウツジンより  
はーまーで。うく却かへ急にとひをなり。万葉ミツバチのちすなど小  
うきばは。絆ハシマ。うくふて。うくせすみて。とひをなり。詔詞。万葉  
など。小。而ま。隨ハシマ。の字をちるにてもあくへし。されど。ふくよ  
まく。信よ半ハミタマといと。まくは。まくもある。温ムカシる  
まく。信よ半ハミタマといと。まくは。まくもある。温ムカシる

ものとくとう。古今ミツバチ上の頃も。日もとうかづく。もの跡ハシマありか  
うきげを。とあるなども。日も照るまくかて。空のまもとひこと  
なれども。よくせざれアモ。信よを。日も照れども。ときのやうにも思  
もくなく。かくぞあなるも多くある。人ヒトはまく。あくね  
ア。かくまば。ほむひかづく。まひのまも。ゆくといふをかて。  
宇經ウツジンのまも。かくぞあく。まくべ。一首のまも。夜も經ウツジンか  
る。夜經ウツジンか。即ハシマもあく。まく。かくぞ。宣アマシ。あれくし。夏ハ  
日のもく。明日の書を経ウツジン。万がもたを。明日のもく。日一日。経  
くま方アモカニなまくやうに。とうきにもあく。うと思もく。なり。  
よひとハ。宵禁ヨシキの書を。まよひあく。代ハシマ。想のまを。いへる。ア。む  
とハ。明日一日のまを。いへる。まく。まくかくぞ。時ハ。明日の

おきそんとまおきそる人の作あとふ。すくやうたるにもあそん  
う。それどたうふきのるごとれバ。おとく考へべきが。

夏の水乃舟をほゞなくぬきどひし。おとくかくらうきのふ  
なご 舟風景

○せうもいとくらうごと。奥義抄る。舟そよげ。もあくぬき。朝  
の同月の出ぬをどき。おとどひあして舟をそよぎ。からうとい。お  
とくあくいひあすをなうとあきども。穏ゆも思えね。師翁云。友  
の船をかどあくめ。なれど。夏秋の舟。おまえおてあれバ。舟へ登  
舟の舟を従<sup>タ</sup>。舟。おとを舟へかくらうぎ。よとくの舟  
くらう。からうき。からうけみて。兼<sup>カ</sup>度<sup>カ</sup>集よ。白雪抄。年  
なづく度の梅。あとからうて。おひひや。いきぬ。とあるなどふて。はす  
のかくらうすといふをもくね。

かくらうせば岸とびこみて。なまゆけぎ夏の舟。くる舟をかくら  
○抄る。鶴和名。鳥鶴淮南子。遊仙賦。すややもをがくにとくみ。源氏浮  
舟。すら。歌をもかくさぎ。とく。せうハ。魏武帝の短歌行。月明星  
稀。鳥鶴南飛。ほひの由童蒙抄。あり。船。かくさぎの岑。こゆる尔。  
夏の舟の入ふ。れ。う。う。あ。な。う。船。こ。る。い。船。ゆく。ま。な。り。う。  
とく。う。う。今。う。よ。ま。う。と。船。一。夏。月。同。ふ。か。さ。く。二。あ。よ。お。ホ  
か。う。り。あ。も。苦。愁。万。愁。集。下。ふ。も。愁。の。め。く。ゆ。く。と。ま。テ。鶴鏡飛度。嶺  
無。閨。ち。い。と。り。ふ。詩。を。流。う。き。ま。お。ナ。ハ。鶴。飛。山。月。曙。チ。里。か。さ。う。度  
の。峠。と。び。う。も。て。あ。き。ゆ。け。き。み。ふ。う。く。と。舟。う。と。う。と。河。の。な  
ど。小。う。れ。ぎ。か。さ。う。き。を。歸。ナ。月。と。え。な。う。あ。く。ま。な。う。我。き。ば。い  
き。い。に。き。き。ふ。て。舟。底。ぶ。形。の。舟。と。も。る。ゆ。か。り。ふ。と。く。先。あ。る。な。う。

筆一。舊本方索の侍ふ。鷺鏡ともゆり。又まほおきの下句などのかは。  
きは多てそのゆゆなり。漢國の鷺とりふねを。毛風きよぢの  
きども。うかてかさだりゆき。鳥なるの數はあくぞくべし。  
涼風箋やも。洲またよだるかさだらしきとあれど。いづきよ志  
ても疇の中の一種とゆゆなり。よつて。此集のうきも。まほあきの  
あふり合ひ。夏秋かくはせば考を施城で作りく形の。白く光ひ  
をそて。うちほくふ。短歌の身の山端小院すよと呂ふ。といふと  
るん方。かくべきなり。夏の風すむとくふき。短き夜なれば。身  
の行ぐもの早かればなり。かくかさだのす。又漢風みて鷺と  
りふねのことかど。いと妻まほあれども。すぢかながお化み出せり。  
妻くいかーことを見てゐぬべし。

松をも夏もゆけがわくぎにあくをうつてこくらうすき

○きはくうなり。方索ハ時をすまく小聲の秋風よ萩喫ぬまやく志の

トキ。とくふやくをし。

うつのみこの。やるをとくへてといひゆられど。わくへの。う  
きみの袖ふつみて。

○此詞も。いそくたうなぬきなり。大和物語小字。桂の  
みこ小式教へ。ますくゆひゆる時。もま小さくひゆる。うな  
みさん。は男まをいとめでたうとゆひうけをゆく。えあ  
そゆはざりうなり。音おとびありきゆるを。かきやくへてと。け  
わくちふの。ゆゑをせられど。かきみの袖小聲をとくへてつ  
つて。ほんぞゆきとくせえきせけつ。をじもくこと

又くらう。うふぬき。童女をひふ。万葉十六。櫛の寺のち。唐  
小も。髻髮。宇奈。桂のまこと。寛平帝の室女。小おも。あして。  
馬とぞくらう。

室子内親王。よやまれ。かざみ。汗衫。とちて。童女のまこと。  
物なり。縫ぎす。ハ。被衣。ひて。庇いとせし。飾抄。ゑくらう。

モ。

つえどもかくれぬ。そのきあつむーの夕より。あねる。思ひがくしき。定  
○嘗のす残。すくなむ。ぬよなと。我。すくべて。深く感。じ。も。き。よい  
ひて。きて。氣も。ほめくふては。と。つ。を。かく。そ。と。な。師。云。大。れ  
物語の文を。引。く。か。て。ば。す。が。き。い。と。ゆ。く。う。な。り。されど。又。思ふ  
小。大。物語の文を。ゆ。一。お。も。ろ。ま。き。ま。よ。つ。と。う。お。た。く。物語  
ら。さ。た。け。後。撰集の詞。ち。が。ま。す。か。て。桂。室。小。き。ざ。ぬ。そ。ま。の。主

人の。め。か。ま。く。小。室。を。と。り。て。ま。で。室。を。影。緑。の。め。く。に。う。み。る  
よ。も。あ。と。べ。一。と。う。は。の。す。み。き。ま。す。か。一。も。め。ぐ。へ。き。こ。と。な。り。  
又。じ。ま。く。は。い。あ。女。す。う。べ。主。人。桂。み。こ。の。意。ま。せ。う。ま。方。あ。残。  
下。小。ち。ひ。ふ。く。そ。て。よ。も。と。ま。れ。る。が。み。こ。の。ほ。ん。か。も。さ。う。か。ー。と。思  
し。感。ト。ゆ。ゆ。ゆ。よ。も。あ。ん。き。う。の。ゆ。ふ。て。よ。あ。と。へ。一。う。き。こ  
ろ。い。小。り。よ。あ。う。と。い。ま。れ。と。う。

影。ま。ぞ

天。川。あ。ま。く。ま。く。一。夏。秋。を。流。く。月。乃。よ。ど。む。下。も。な。  
○夏。の。月。の。り。く。す。が。早。き。す。を。ひ。よ。ふ。て。か。う。れ。と。る。あ。あ。一。續。後  
櫻。夏。小。夏。の。秋。ハ。水。す。き。れ。を。や。天。川。あ。だ。れ。一。月。の。新。も。と。う。え。ば。と  
あ。る。も。全。く。回。ド。

つうひね云々夕ごろ  
さづふことあり  
て。ちうありきも  
せで。茶原雅正が作  
ふ。えとてこぬ  
をついてみのむく

身ざらそくすすりて。ばかりのまきもさで。さでこぬよーい  
ひて。ふとのれくふ。

○まかわあさたハ。虫歩行とひこと。すゞこぬち。けうぬと云  
うとす。されど人の評へりるるを。すゞこぬといへふ  
き。化ふ例をあさやうなれど。雅正のあさきばして。まくし  
きすとひやうする。までこぬといふ詞のうへいてき。  
うせゆれども。又あは下向ふてち。我が不行すとすゆるなり。  
は詞也。家集みへ。じきつごそりに。すきなとのぬさんよおく  
まく」とある。

貫之

花もちとほとくぎはそくいゆすまで。忍ふもゆうすなうにす。うか  
ゆうぎもあ集

○春ももとて。夏もあはなうまで。忍ぶ许かもゆうすなうにす。うか  
さくと遠くしきすなう。花もそとし。忍ばる。まくし  
へ往くるとひよ。夏の果つるすをいへるなう。又。忍ふももと  
ひよて。五よ疋をみて。月日をとくすをすくえしるなう。

五

茶原雅正

毛多乃多をも高をもひづくふもひくかく身ハまぐにのひだり  
○懶惰身モロウキハ。とかく。茶多の色多なふをも。むなしく賞讃もきばよ。忍し  
候ひだりとて。我も君も。互よ続かうといふことをふくぞとひだり。  
以西ある。うけうけうちをふきのうと。詞の上不てち。我身がす  
のをひひて。またきよてち。彼方よりひおろせつまきふくふ  
きるなう。よのうーとい。俗うふ。タイゲナよ。ブシヤウナ。物クサ  
太美

仁などいふよとし。後世より憂き事りとんじるを供するす。終至大  
人玉穀ミタケよいもれたり。 あ句ののを。傍シテ小。トカクともにとし。

影ヒメえ

よみ人あらば

夏むアマの身みをまで伊勢集たまへあらば我やおのぞん人ヒトをませ  
○夏虫アマミツの少コトハ入スルて身みをまひても。魂ソウをまかハてあるぬナシバ。かち  
我ガんガして。されをまあびて。身みをま失フん。身みがシなシれガ。人ヒトよ  
をまつむシをまく。やすシをまぐ。身みのゆムゆム少シ。人ヒトよ  
うんうシ。されをまうなシもすとシうなシれバ。とシうべシ。 なまシ身み  
らをまハ魂ソウ一シバナシ。 四シ句ハ。我ガんガして。とシうをまなる  
べシ。桂ケイ井イ法師ハ。我ガの写シ誤スルやシうれスきド。とシあシもシえシど  
うシハシうシべシ。 はシ伊勢集ミタケよ出スて。ゆシよシひのすシ身みをまげシる

ふなつもハまきうシてや人ヒトよあふとシくシん。とシうシすシうシ。引ハ合ハと  
て見シるベまシうシ。

夏虫アマミツ。身みあらうシゆシの小シ。

こすひシく形シがシむシ神ミの病シけシまシ身みの裏シをまやシとシるシく  
○はシ奇キ。僻ヒ按シ抄シよハ。月シ照シ平ヒラ砂シ。夏アマ夜ヨメ霜シといふシをまゆシうなりシとシあれシ  
毛シ。朗ラ詠シのシ待シ内シ。かにもシ。月シ新シをまよシうシ侍シあシどシき。いとシ多く。又シ詩シ句シ  
うシうシもシかシうシ小シうシべシまシうシだシ。 一首シのきハ。今シ歌シかく身み  
をま離シるシ神ミのシ何シなくシ感シ情シ小シ堪シうシてシ傷シてシ傷シてシ月シ新シのシあシふシお  
きシうシたシるシおシめシあるシをシ。ねシとシるシふシやシあシん。秋シもシ病シあシげ  
たシゆシてシ神ミのシめシべきシすシふシきシばシとシうシべシ。

みす月シ。そシへシ小シ川シ新シよシうシ出スてシ。夕シのシあシきシをまるシてシ。

○六月の大祓也。晦日なづよりハ祓あり。されど。半は小こなりて。契  
冲法師も。かぎりあるら事ことつごとくにますかき。わくく  
一の夜よてち。便びんある日ひ小こさむたゞたゞといちき。萬葉まんよう抄  
ふも。寔まことハ晦日なづ小陽こひ也。六月中小便宜べんいある時祓ほけりなり。  
家從いえづなりととかく。正ただ晦なづ云いせよ。夏祓なつほを。廿日にじよりとん  
ぬくもぬくもを供そなへ。夏なつももへき。夏の間まいりふても有あるべきす  
ゆていもゆ。卯夕うゆなど小こすすききを。懈急けきゅうもも。六月晦なづ  
日ひ小こ及およぶなな。六月晦なづハ大祓おほほ也。朱雀門しゆせきもんのああててま義めいあ  
るすすめうといちねね。は從つのめくふきふき。大祓おほほと夏祓なつほとも  
もくもくうう別べつもも。夏祓なつほいつといふ。さざざざくくハちきちきすすを  
が。はよハ猶よく考かへ晦日なづの大祓おほほのす。はあふもあづあづす。  
て遙考とよかりよべ。六月の六月むつの大祓おほほのす。はあふもあづあづす。

御ごくばほ御ごもをも。みふれみふれとときき切きて。祓ほしふきふきととくくぬぬべきなり。  
かも川かもがわの水底みどりをみみて。晦なづ月つきをゆゆれて。そんととや夏なつももへままま  
○行ゆてそんととや。草くさそそんととやとととききなり。ゆゆくをくととひ。來くを  
行くゆとと互通とひきて。りすりす。多く例たとえ。万葉まんよう一い。大和おおわよよううゆゆてて  
御ごくばほ御ごもをみみて。山さんすすびびててゆゆかる。ととけけるるななどども。ととくくく  
ゆゆううんととくくききふふるる。ととれれど。ととううききををりりふふも。ととくくべき  
をを。ととくくふふくくととりりややののすすふふきき。ととれれあるある不ふののすすくく。刻ときととりりふふべき  
大和おおわの方ほう。そそ人ひとののふふてて。そそんんととききいいへへ。即そちちいまよよ川かわ來きよよ出で。ああよよきき。おおよよののんんううてて。かかくてて。一い首くびののききハ。加か茂も川かわ小  
祓ほふ出でるるに。水みずようようつつてて。底そこももああけけててるる月つきののすす。一いも  
ししろしままををそそきき人ひと。おお夏なつ祓ほ。ふととくく川かわ來きよよ出で。かかくく清きよ  
舟ふねををそそんんととののよよああべべーーととよよなり。

子年身よりあきけると。

セヨを六月

まわるまつたの川原をなうへり後セヨを六月のまきかをみをだすハシよ  
○古今大人云詩小雅大東篇云维天有<sup>星</sup>漢監亦有光跂彼織女終日七襄。  
とて傳曰襄反也と何う。こきをハ大よ美れども。あくへもと云  
御きゆるすなり。さて七夕へりとハ七度の祓のすなり。後一條院  
の時時小七度の祓ありし。野府記よりぞうとひむれと。此  
往かすと。師翁の考二義あり。云。子乎ハ閏六月ある年。初の六月  
晦日小川原よ出て祓を行ふをよそうむるなり。但。閏年あり。年の六  
月よ。後の六月よ行ふ。それもいまともくも。今秋初の六月よ  
考へざれども。あく初の六月のこととしてゆるなり。今秋の晦日小  
糸をぎをひくとよ。織女ち天漢を七八とすとりふを文ぬあさ  
ぢ。初の晦日おせびと立つて是後。の晦日をみをだふを用ひよと。よ

をうち。一説かと。七度の祓のす。こくふ入用あし。たゞ天の川原  
をせうへりと云本文を極向よせるがもなり。又一説ち。織女ハ天  
漢を七度うへふとりふを文をみて。織女へよみかけくるすなり。そ  
ちまづ。織女ち。七月七日の夕小天の川原へ出るものなり。さて七夕  
の祭より。すべて七の数を揃へて參らむをめり。又糸をぎふ七度の  
祓とひすとむ所と。又川原へ出て行かすにもあり。七夕ふもかどと  
き此の糸をぎふとあれど。せきの縁あるすとむをとくい会を  
てすまなうなる。一首のきハ。今この川原へ出て。人をまみそ  
ぎをする。今年ハ閏六月のあるすおきバ。七年七日すと。やく日數  
のをどあるすおきバ。たかち。娘ハ。糸をぎ絹きるを。後の六月  
の二十日を。みをだすと用ひよとひすなりといはれと。かくて。

國存ある年六七月祓ひまづも國存ふ行ひとすとおがくくて西  
宮記六月の条よ大祓延喜元年國六月晦日有大祓と見えや後  
書よあきども東籬の文曆二年乙未六月の条よも廿日辛卯來月  
依爲國月今夜可被行六月祓武否事爲藤内判官定貞奉行被尋問有  
職并陰陽道輩河内入道寺申云如義解文者可行于國月事分明也和  
哥云ノ子ノミワカテミソカトハセヨ然者其上治承四年建久八年  
建保四年皆被行于國月云諸人一同之資後申云兩月行之例存之  
云々而就多云義不被行えこと見えり此東籬よ後のみさうを三  
く傳説あるがゆゆすかす。己も研考へる事もあきどいまとよく  
も思ひ定免ざれど。終よく考へて追考小記す。

後撰和歌集卷第四新抄

